

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ちんどうくん
陳童君

本論文は堀田善衛の戦中戦後の上海での「留用」(中国政府への協力)体験をもとに、戦後日本の知識人にとって「中国」がいかなる意味を持ち、文学的表象として表現されたのかについて、主に堀田の初期作品を通して考察したものである。

全体は二部構成で、第一部は八章からなる。一章は戦時下の評論をもとに、小林秀雄、堀辰雄の影響のもと、芳賀檀に傾倒しつつも、芸術至上主義者としてあえて「孤独」を選び取ろうとした過程が明らかにされている。二章はデビュー作「祖国喪失」を扱い、上海で敗戦を迎え、「無国籍」である、という感覚を出発点にあらたな主体を立ち上げようとした経緯が分析されている。三章は「歯車」を対象に、新資料の草稿を参照しつつ、「留用」日本人という特異な立ち位置が、結果的に政治的な善悪二元論を相対化する「中間、的な思考を育んでいったプロセスが明らかにされている。

三章は「広場の孤独」を対象に、同時代の国民文学論争の中で、政治的主体としての「国民」でもなく、また「祖国喪失者」でもないそのありようが、「無解決を書くことが解決である」という独自の創作方法に結実していく過程が浮き彫りにされている。五章では作品「漢奸」を対象に、中国人の対日協力者の運命を扱った阿部知二、武田泰淳の作品と比較した上で、安易に共犯的な罪悪感に引きづられることなく、「漢奸」に対する自らのまなざしを批判的に相対化していった道筋が明らかにされている。「留用」と「漢奸」は戦争期の日中関係を論じる上でこれまでの文学研究が見過ぎてきた重要なテーマであり、本論によって本格的なメスが入られた点は高く評価されるべきであろう。

六章は「断層」を扱い、中国語の〈不在〉に着目した上で、安易な連帯感を選ぶことなく、「日本／西洋」の軸とも異なる第三の視点として「中国」を探り当てようとする、より内在化したモチーフが明らかにされている。七章は長編「歴史」を対象に、中国の作家茅盾とアンドレ・マルロオの影響を明らかにした上で、他者と対峙して主体性を獲得していくプロセスと、「傍観者の無力」とを一体のものとして抱え込もうとした独自性が浮き彫りにされている。終章では、これらを受け、「中国」の位相を「西洋」との対比を通して確認しようとしたその文学の特色が展望されている。

第二部の資料編は、上海体験時の詳細な経緯と、新出作品の紹介、研究文献目録等からなり、第一部で初めて研究の俎上にあがった貴重な草稿類と共に、堀田善衛の基礎研究の確立に大きな役割を果たすものである。

総じて対象を1950年代の小説に絞ったために、堀田善衛の長期にわたる文学活動の総体が見えにくくなっている点は否めないが、戦後の日本文学に於いて「他者」としての「中国」がどのような意味を持っていたのか、という点を同時代の状況の中で具体的に明らかにしようとした点は高い評価に値する。

よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。